

昭和 SPレコードで迎れば 皇太子殿下御外遊御仁徳謹話

S Pレコード収集家 ■ 城内 實

(一)

今年のある日、偶然にもSPレコード専門店で大変珍しいレコードを発見した。題名は「皇太子殿下御外遊御仁徳謹話」、語り手は「香取艦陪從大阪毎日新聞記者加藤直士」となつてゐる。

このレコードはまぎれもなく大正十年の皇太子裕仁親王の欧洲御外遊に関するレコードである。おそらく、御外遊直後に吹き込まれたものであろう。

(二)

首相をはじめ、山県有朋、松方正義、西園寺公望といった元老は、東宮御学問所における御教育の総仕上げ、いわば卒業旅行として熱心にこの計画を進めた。それに対して、東宮御学問所で倫理の授業を担当していた杉浦重剛は御外遊は必要なしとの立場をとり、国家主義的な民間の思想家も同じ意見であった。また、貞明皇后は病氣療養中の大正天皇の身にもしものことがあつたらという御懸念から御外遊に強く反対していたのである。

しかし最終的には、外務次官駐独、英、米大使を歴任し、パリ講話会議の全権も務めた日本仁親王と十五名の供奉員の乗る御召艦「香取」は、原敬首相らの見送る中、横浜港を出航した。実は、この皇太子の御外遊実現は一時危ぶまれていた。原敬

にはいわば首席随行員たる供奉長であつたが、皇太子殿下が御帰朝後に攝政御就任となるや、東宮大夫に抜擢され、さらに昭和二年には徳川達孝伯爵の後を襲つて、侍従長に就任した。よほど昭和天皇の信頼が厚かつたのであろう。ただ、惜しいことに珍田は天皇陛下の即位の大礼が行われた翌月の昭和四年一月にこの世を去つた。ちなみに珍田の後任の侍従長には鈴木貫太郎が就任している。

(三)

このおよそ八十年前の古いSPレコードの中で、大阪毎日新聞の記者であつた加藤直士は、皇太子殿下のお人柄を次のよう

に伝えていた。

「我が皇太子殿下は（中略）、我々臣民に対せられましては、

極めて平民的にわたらせらるるでございます。（中略）我々が御敬礼を申し上げますれば、その都度御軍服の場合は必ず握手の礼を賜り、御平服の場合は一旦御脱帽になります。かくのごとく我々を貴賤上下の区別無く、人をして御取扱い下さる御態度は誠に誠にかたじけなく、次第でございます。」

このような皇太子のお姿は、いわゆる「庶民感覚」というあいまいなものとは全く別ものであり、むしろ帝王教育に根ざした崇高な姿勢と言えよう。

ケンブリッジ大学御見学の際に皇太子殿下が希望された講演の題目にもそのことがはつきりと現れている。

「その時殿下は即座に、『しからば、英國の皇室（ママ）とその人民との関係について一場の講義を頼む』と仰せられたと承ります。何たる御聰明、また、何たる麗しき御心馳せでござりましょう。」

(四)

加藤はまた、殿下が大変質素であったことを次のように紹介している。

「殿下は御自身のことにつきましては、また、想像以外に極めて御質素にわたらせられます。」
 （中略）御肌着類は全て木綿類、しかもメリヤスのシャツ、あたりまえの木綿の靴下等を召しておられます。

また、皇太子殿下が庶民の生活、労働状況につき大変深い関心を抱いていることにつきこう述べている。

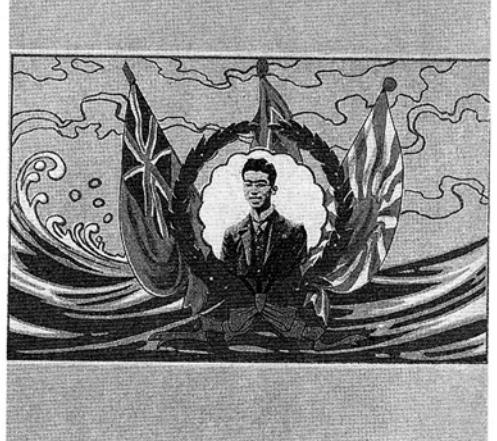
「殿下は我々下々の事情、生活状態、労働状態等を知りたいと思しめず御熱心が極めて猛烈なものでござります。これは殿下が東京を御出発前からのご希望でありましたが、丁度長崎、門司辺において『石炭の積込みといふ』と仰せられます。」その際に司令長官は「石炭の積込みは最も汚い仕事でありまして、とても殿下が御近寄りもできるも

のではござりません」と答える。

「すると殿下は『いや、その汚いところを私は見たいのだよ』と仰せられます。果たして、殿下はいつの間にか供奉員をも従わせられずに、採炭口にお下りになりまして、人夫や水兵が入り乱れて石炭を積込む状態を御覧になります。（中略）丁度その時、甲板の底から三名の機関兵があまり熱いのでちょうど息をつこうと思つて頭を甲板の上に出したのであります。見ると殿下がおいでになるので、びっくりいたして引き下がります。ところが、殿下は『ちよつと待て』とおとめになりました。その三名の機関兵を御携帶の写真機械でパチッとおとりになつたのであります。それを見たり聞いたりいたしました者らは皆感激致します。」

(五)

そして最後に次のような大変感動的なエピソードを紹介している。



(六)

こうした心温まるエピソードを聞くにつけ、学習院長乃木希典、東宮御学問所総裁東郷平八郎、同御用係杉浦重剛教授といった人々の帝王教育が実際に見事に結実したこと改めて強く認識させられる。

(続く)